

2023年度
関西学院大学ロースクール
C日程

一般入試（法学未修者）
特別入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

問題文を読んで、〔設問1〕および〔設問2〕に答えなさい。

〔設問1〕

下線部①につき、筆者によれば、「市場」はどのような意味でその外部（すなわち「家族」）に依存しているか、そして、その場合の「家族」において女性にはどのような役割が割り当てられているか。筆者の主張に即して、説明しなさい（400字程度）。

〔設問2〕

2022年7月13日、スイスのシンクタンク、世界経済フォーラム（WWF）は、2022年版の「男女格差（ジェンダー・ギャップ）報告」を発表した。それによれば、日本は調査対象となった146カ国中116位だった。また、日本では政治、経済両面での女性の社会進出（例えば女性議員の数や会社役員の数、収入格差など）が依然として低調なことを反映し、先進7カ国（G7）、東アジア太平洋地域諸国のいずれでも最下位であったとされる。

フェミニストのうちには、そのような社会進出の数などを上げるこそが最優先課題と設定する立場もありうるが、筆者ならば、このような立場に対してどのように反論すると考えられるか、簡潔に論じなさい。そのうえで、あなたの意見も述べなさい（400字程度）。

問題文

解放の思想は解放の理論を必要とする。誰が、何から、いかに、解放されたいのかわからなければ、現状に対する不満や怒りのエネルギーは、方向を見失う。

女性の抑圧を解明するフェミニズムの解放理論には、次の三つがあり、また三つしかなかったと言える。

- 1 社会主義婦人解放論
- 2 ラディカル・フェミニズム
- 3 マルクス主義フェミニズム

社会主義婦人解放論、ラディカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズムの三つは、いずれもマルクス主義とそれに対する反措定または改訂として成立している。女性解放の理論が、マルクス主義の射程から脱け出していないのは、マルクス主義だけが、ほとんど唯一の、(近代)産業社会についての抑圧の解明とそれからの解放の理論だったからである。

伝統的な社会主義婦人解放論は、差別と抑圧構造の解明に、階級支配という変数を持ってきた。それによれば、女性の抑圧は階級支配の従属変数であり、したがって階級支配の今日的な形態である資本制に反対する闘いが、女性解放のための闘いであり、プロレタリアの男性と女性とは、共闘しうるはずであった。階級支配が廃絶されれば、女性は自動的に解放されるはずであった。

だが、女性にとっては「近代市民革命」もそれにひきつづく「社会主義革命」も、「自由」と「平等」を約束されながら「裏切られた革命」に終わった。市民革命は「ブルジョアの解放」を、社会主義革命は「プロレタリアの解放」を約束したが、革命のあとに達成されたのは、女性のエネルギーを利用しながら、それぞれ「ブルジョアの男の解放」と「プロレタリアの男の解放」にほかならなかった。女性は、「身分」や「階級」という変数のほかに、自分たちを男から分かつ「性」という独立の変数に行きあたり、その理論化の必要に迫られた。

(中略)

ラディカル・フェミニストは「市場」の外部に、「家族」という社会領域を発見した。

「市場」が社会の全域をおおっているという前提は誤りで、「市場」には限界とその〈外部〉が存在することが明らかになる。「市場」の限界は、同時に市場についての理論であったマルクス主義理論の限界でもある。マルクス主義者の誤りは、「市場」の支配が社会に全域的に及ぶと考えたところにあった。

ラディカル・フェミニズムが、60年代末の対抗文化運動 **counterculture movements** の中から生まれてきたという事実は、示唆に富んでいる。「市場」の限界は同時に「近代」の限界でもあった。近代批判として登場した対抗文化運動は「市場」の外側にあるものを

次々に明らかにすることで「市場」の行き詰まりを告発していった。

彼らが「市場」の外部に発見した二つの領域とは「自然」と「家族」であった。「市場」は閉鎖系ではなくその実、開放系だったにもかかわらず、たとえば近代経済学は、「市場」内部を閉鎖系としてその中の交換ゲームを扱うというやり方をとってきた。だが、システムには必ずそれに関与する外部「環境」がある。「市場」というシステムもまた「自然」「家族」という二つの「環境」から、ヒトとモノとをそれぞれインプット・アウトプットしていたのである〔図1〕。「自然」という環境からは、「市場」はエネルギーと資源をインプットし、代わりに産業廃棄物をアウトプットする。この「自然(という)環境」は、ブラックボックスのように見えない存在だった。長い間「自然環境」にとってはエネルギー・資源も無尽蔵なら、汚水やガスのような廃棄物の環境自浄力も無限と思われてきた。

だが、60年代高度成長期を通じての日本の産業化の完成は、環境から市場へのインプットにもアウトプットにも、限界があることをあらわにした。インプットの側では、資源・エネルギー危機が73年のオイルショックとなって成長の夢を壊したし、アウトプットの側では、水俣病の悪夢が、産業廃棄物公害の恐ろしさを通じて自然の自浄力の限界を私たちに示した。

フェミニストが「市場」の外側に発見した「家族」という環境も、「自然」と驚くべき類似性を持っている。「自然」と「市場」との関係および「家族」と「市場」との関係の間には、論理的なパラレリズムがある。「家族」は第一に、性という「人間の自然」にもとづいている。「家族」という領域から「市場」は、ヒトという資源を労働力としてインプットし、逆に労働力として使いものにならなくなった老人、病人、障害者を「産業廃棄物」としてアウトプットする。ヒトが、「市場」にとって労働力資源としか見なされないところでは、「市場」にとって意味のあるヒトとは、健康で一人前の成人男子のことだけとなる。成人男子が産業軍事型社会の「現役兵」だとしたら、社会の他のメンバー、たとえば子供はその「予備軍」だし、「老人」は「退役兵」、病人や障害者は「廃兵」である。そして女は、これら「ヒトでないヒト」たちを世話する補佐役、二流市民として、彼らと共に「市場」の外、「家族」という領域に置き去りにされる〔図2〕。健康な成人男子だけを「人間 man」と見なす近代思想のもとでは、その実、子供は「人間以前」の存在だったのだし、他方で老人は「人間以後」の存在、女性は「人間以外」の存在なのである。近

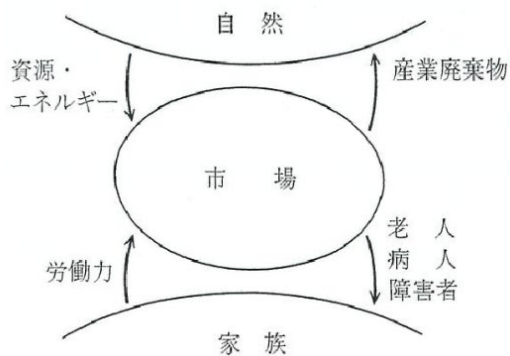


図 1

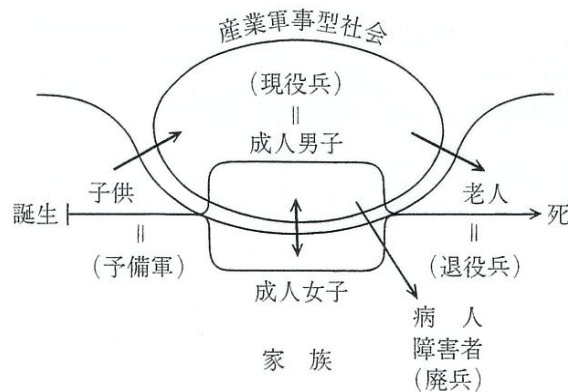


図 2

代主義的な「人間」の概念は、必然的に「人間^{ヒト}でない」人々を生み出し排除することによって成り立っていた。

しかし60年代末から70年代にかけて噴出してきた「家族」問題は、この家族が、インプットの側ではヒトという資源の供給源として無償でかつ自動的に働くわけではなく、またアウトプットの側では「廃棄物」となったヒトを受け容れ支えるキャパシティが無尽蔵だというわけでもない、という事実を示した。女たちは、「家族」という「市場」の外部を支えるコストが、もっぱら女たちの肩にのみかかっている重圧に対して、悲鳴をあげ、抗議をしたのである。

「自然」の崩壊と「家族」の解体は、モノの生産とヒトの生産について、「市場」というシステムが、何を支払ってきたか（そして何を支払ってこなかったか）を、私たちの目の前に明示した。それは、「市場」には「自然」と「家族」という〈外部〉があり「市場」はこの〈外部〉に依存してはじめて成り立っていること、この「市場」にとっての環境を維持するにはコストがかかることを、私たちに教えたのである。

（中略）

戦後、日本でくり返された主婦論争の中には家庭が資本制の抑圧からの「解放区」であるという、家庭擁護論や主婦賛美論があらわれる。この考え方は、反市場原理派には魅力的な考え方だが、そこには「家族」が「市場」から独立 **independent** で非関与 **indifferent** な領域だという（あるいはそう思いこみたい）誤ったファンタジーがある。第一に、市場と家族の間のこの分離を作り、それを強いたのは市場の側であり、第二に市場の〈外〉にいる人々はまさに市場のつごうによって市場から排除されたのであり、第三にこの市場の〈外部〉の存在によって誰よりも利益を得ているのは市場そのものだからである。

女性は労働市場に参入することによってなるほど資本の直接的な支配下に入るが、家庭にとどまっても、資本の間接的な支配を受けている。「間接的な」というのは、「より緩やかな」支配を意味しない。「間接的な」というのは、ただ直接的な目に見える **visible** 支配に対して、目に見えない **invisible** 支配という意味にすぎない。貨幣経済以外の生存 **subsistence** のオルターナティブを奪ってにおいて、経済的に依存させるようにしむけた上で、「誰が養ってやっているんだ」という権力支配に組みこむことの、どこが間接支配だろうか。これもまた一つのむき出しの支配にはちがいない。それが「間接」なのは、ただ「市場からは見えない」という意味においてである。

第二に、逆に女性が市場へ出れば「市民」としてカウントされることになるかといえば、必ずしもそうとは言えない。ブルジョア女性解放思想と社会主義婦人解放論とは、女性の職場進出が解放の戦略だと考える点で、奇妙な一致を見せている。

女性の解放は、全女性が公的産業に復帰することを第一の前提条件とする。（エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』）

女性が労働市場に参入しても、女性自身が自分の労働力を自己所有していなければ、女性は労働市場の中で奴隷化するだけである。たとえば娘を年季契約で勤めに出してその賃金を親が前借したり、妻の勤め先に行って夫が妻の給与を受けとったりするような慣行があるところでは、女性は自分の労働力を自己所有した自由な労働者とは言えない。

女性が労働力を自己所有している場合でも、女性は労働市場に、不完全な、二流の労働力として現れる。市場の〈内部〉は——理論的には——性に非関与だが、市場の〈外部〉はそうでない。性に関与的な市場の〈外部〉すなわち家族の編成原理を、市場は隠密裡にとりこんで、性という変数を搾取しようとする。男女賃金格差はその例である。

このように、女性にとっては市場から〈外〉へ出ることが解放でもなければ、市場の〈内〉へ入ることが解放でもない。この二つの方向は、両極端のように対立しているように見えるが、その実、市場とその〈外部〉とが相互に独立しているという同じ前提に立っている。しかし市場の〈外部〉が市場から自由でもなければ、市場は〈外部〉から独立してもいない。市場が〈外部〉を否認する全域性を持っていると仮定するのも誤りだが、市場が〈外部〉から、あるいは〈外部〉が市場から、それぞれ独立した閉鎖系だと考えるのもまちがっている。市場とその〈外部〉との関係は、①相互依存的なものである。

マルクスが見落としたこの市場の〈外部〉に、フェミニストは、家族というもう一つの社会領域を発見した。家族は、市場に対して労働力の再生産という機能を担っていた。家族は労働市場に人間という資源をインプットし、アウトプットする端末だったのである。

この家族は、本能の「レッセ・フェール」のもとに置かれたわけではなく、それ自体が一つの再生産の制度であった。この中で、人々は再生産をめぐる権利・義務関係に入り、たんなる個人ではなく、夫／妻、父／母、親／子、息子／娘になる。この役割は、規範と権威を性と世代とによって不均等に配分した権力関係であり、フェミニストはこれを「家父長制 patriarchy」と呼ぶ。再生産の制度は歴史貫通的に存在するが、近代社会に固有なその歴史的な形態は、家父長的なブルジョア単婚家族である。この単婚家族内の家父長制的な性支配のメカニズムを、フロイトはエディプス・コンプレックスと呼んだ。エディプス・コンプレックスはまた、それを通じて再生産の制度それ自体が再生産されていくしくみでもあった。

市場とその〈外部〉すなわち家族との関係、歴史的な名称を使えば資本制と家父長制との関係とその対応を図示すれば、表1のようになるだろう。

表1

制 度	資本制	家父長制
社会関係	生産関係	再生産関係
社会領域	公	私
支配形態	階級支配	性 支 配
歴史的形態	市 場	ブルジョア 単婚家族
統制原理	市場原理	エディプス・ コンプレックス
社会理論	マルクス理論	フロイト理論

(以下略)

上野千鶴子「家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平」(岩波書店、2009年)より抜粋。なお、出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。

2023 年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【C 日程：論文】

《出題趣旨》

設問 2 でも示されているとおり、日本における女性の社会進出は大きな社会問題となっている。本問は、日本を代表するフェミニストの一人である上野千鶴子氏の名著を素材として、読解力、思考力および文章表現力を試そうとするものである。

《解説・講評》

【設問 1 に関する解説】

設問 1 は、下線部を契機として著者の論旨に対する理解力を問うものである。問いに素直に答える姿勢が重要である。まず前半部分については、市場と家族とが二元的に捉えられていることを前提に、両者の関係性を説明する姿勢が求められる。そのうえで、後半部分については、そのような労働力の再生産を支える権力関係（著者が言うところの「家父長制」）において、女性にはどのような役割が割り当てられているかを説明する必要がある。解答例については、以下の通りである。

著者によれば、「市場」はそれ自体自己完結的なものではなく、「自然」や「家族」という外部環境に依存している。後者について言えば、市場がモノを生産するには労働力が必要なところ、市場は、家族という外部領域からヒトという資源を労働力としてインプットし、逆に労働力として使いものにならなくなった老人、病人、障害者を「産業廃棄物」としてアウトプットする。そのような意味で、市場は家族に依存しているとされる。

このように、ヒトが市場にとって労働力資源としか見なされないところでは、市場にとって意味のあるヒトとは、健康で一人前の成人男子のみを意味する。そこで、女性には、このような成人男子を市場に提供するため、その「予備軍」たる子供を世話する役割のほか、市場からアウトプットされた「ヒトでないヒト」の世話をする役割が割り当てられる。このような労働力の再生産を支える権力関係を、著者は「家父長制」と呼んでいる。（以上の 2 段落で 395 字）

【設問 2 に関する解説】

問題文全体の読解力、思考力および文章表現力を試す問題である。

本問では、著者の主張を前提に立論することが求められているのだから、解答にあたっては、まずは著者の論旨を端的に確認しておくのが望ましい。とりわけ「女性にとっては市場から〈外〉へ出ることが解放でもなければ、市場の〈内〉へ入ることが解放でもない。」と述べている箇所などは、重要である。おそらく著者からは、女性を抑圧する社会的な構造自体が変わらない限り、女性のさらなる犠牲のもとで社会進出が実現されるだけで、女

性の地位や利益の改善には必ずしもつながらないといった反論が提起されるであろう。実際、筆者からは原典でも同旨の主張が展開されている（450頁）。興味のある人は是非原典にあたってもらいたい。

もちろん、著者の立場に対しては反対論も十分成り立ちうるから、自己の意見を述べるにあたっては、筆者の見解に賛成でも反対でもどちらでも差し支えない。この点については、論旨展開をみて相応に評価する。解答例については、以下の通りである。

筆者は、「女性にとっては市場から〈外〉へ出ることが解放でもなければ、市場の〈内〉へ入ることが解放でもない。」と述べている。ここからも分かるように、近代以降現在まで続く市場と家族との関係、すなわち家父長制的資本主義という抑圧の構造自体が改善されない限り、単に数のうえだけで女性の社会進出を実現しても、社会（市場）と家族の双方で女性にさらなる自己犠牲を強いるだけで、女性の地位や利益の改善には必ずしもつながらないといった反論が提起されるであろう。

もっとも、まずは数のうえで男女平等を実現することが、従来の抑圧的な構造の変革を促し、ひいては実質的な平等を実現する前提ないし契機ともなり得る。また、多数意見を形成することは、構造改革への影響力を持つうえでも無視できない意味を持つ。したがって、数や比率だけが全てではないことは確かであるが、それらも重要な指標として活用すべきである。（以上の2段落で386字）

【全体的な講評】

設問1については、著者の論旨が明快であるせいか、少なくとも問いの前段（「市場」が「家族」に依存している関係）については、解答内容は比較的良好であった。これに対し、問いの後段（「家族」における女性の役割）については、筆者のいう「家父長制」にまで言及して家族内での権力関係を説明できた答案は必ずしも多くなかった。なお、いたずらに原典の引用に終始する答案も散見されたが、それでは筆者の論旨を的確に理解していると評価することは困難である。著者が用いるキーワードを的確にひろうことも必要だが、それもあくまでも「問いに答える」うえで必要な限度にとどめるべきである。

設問2の前段（筆者からの反論を想定せよ）についても、同様に「問いに答える」姿勢が求められる。そもそも反論を想定する内容になっていなかったり、前段と後段が截然と区別されていないなど、論旨展開に明快さを欠く答案が散見された。また、前段については、設問1での解答と密接に関わるものであるから、設問1において著者の論旨を的確に理解していないと評価された答案は、概ねここでの評価も低かった。後段（自己の意見）については、そもそも著者の論旨を離れて一方的に自分の意見を展開する答案に対しては、「問いに答える姿勢が希薄である」という意味において、積極的な評価をすることは困難である。これに対し、著者の論旨を的確に踏まえたうえで自己の意見を展開した答案については、概ね高い評価がなされた。

以上